

COMPOSIUM 2017

世界中の若い世代の作曲家に創作を呼びかける「武満徹作曲賞」を核とした、東京オペラシティの同時代音楽企画が「コンポーシウム COMPOSIUM」（造語：Composition + Symposium）です。「武満徹作曲賞」は、ただ一人の作曲家が審査員をつとめるというユニークさと、受賞者のその後の活躍などにより、今や世界的に知られているオーケストラ作品作曲コンクールです。19回目となる2017年は、スイス出身のハインツ・ホリガーを審査員に迎えます。20世紀後半を代表するオーボエ奏者として、バロックからロマン派、そして現代作品まで驚異のレパートリーを誇るホリガー。オーボエと並行してヴェレシュやブレーズに作曲を学び、古今の西洋音楽を知り尽くす“知の巨人”が創り出す作品は、言葉と音楽に対する深い探求に支えられ、「私は音楽に対して常に限界に挑戦してきた」と自ら述べるように、前衛的手法を使い、新しい発見に満ちた音楽となっています。この天才的な音楽家が、世界中から集まった応募作品の中からいかなる才能を発掘するか、注目です。あわせて開催する作品演奏会で取り上げるのは、ホリガーが1975年から1991年にかけて作曲した、まさに自身の音楽の集大成ともいえる演奏時間2時間半におよぶ大作、ソロフルート、合唱、アンサンブルのための《スカルダネッリ・ツィクルス》です。世界的な作曲家を迎え、優れた現代作品を優れた演奏で楽しめる「コンポーシウム2017」にご期待ください。



ハインツ・ホリガー [作曲家/指揮者/2017年度武満徹作曲賞審査員] Heinz Holliger, composer/conductor/judge of Toru Takemitsu Composition Award 2017

作曲家、オーボエ奏者、指揮者。1939年5月21日、スイス・ベルン州ランゲンタール生まれ。ベルン音楽院でエミール・カサニョーにオーボエを、シャンドル・ヴェレシュに作曲を学ぶ。さらに1958年からはパリでイヴォンヌ・ルフェビュールにピアノを、ピエール・ピエールにオーボエを学んだ。1961年から63年にはバーゼル音楽院にてピエール・ブレーズに作曲を師事。1959年ジュネーヴ、1961年ミュンヘンの両国際音楽コンクールで優勝し、オーボエ奏者として世界的な活動を始めた。ヘンツェ、ペンデレツキ、リゲティ、カーター、ルトスワフスキ、シュトックハウゼン、ペリオ等の作曲家が彼のために曲を書いている。指揮者としては、ベルリン・フィル、クリーヴランド管、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン・フィル、ウィーン・フィル、バイエルン放送響など著名なオーケストラをたびたび指揮している。作曲家として、その作品はオペラ、管弦楽、独奏、室内楽、声楽とすべての分野に及ぶ。代表作として、《スカルダネッリ・ツィクルス》(1975-91)、ヴァイオリン協奏曲《ルイ・ステーへのオマージュ》(1993-95, revised 2002)があげられるほか、室内楽作品も多く、チェロとピアノのための《ロマンセントレス》(2003)、クラリネット(またはバス・クラリネット)のための《コントレチャント》(2007)、2つの弦楽四重奏曲や多くのソロ作品がある。1998年に初演されたオペラ『白雪姫』では、グリム童話のその後を描いたロベルト・ヴァルザーのテキストを使い、登場人物の影の部分表現し高い評価を獲得、その録音は2002年のグラミー賞を受賞している。受賞歴は、フランクフルト音楽賞(1988)、シーメンス音楽賞(1991)、モナコ・プリンス・ピエール財団作曲賞(1994)、ラインガウ音楽賞(2008)など数多い。2003年にはシテ・ドゥ・ラ・ミュージック(パリ)において演奏会週間が行われた。また、スイス・ロマンド管弦楽団とルツェルン音楽祭のコンポーザー・イン・レジデンスをつとめたほか、2012年のザルツブルク音楽祭でもレジデント・アーティストとして活躍した。作品はSchott Musicから出版されている。

HEINZ HOLLIGER

The Music of Heinz Holliger — Scardanelli-Zyklus ハインツ・ホリガーの音楽 — 《スカルダネッリ・ツィクルス》

5月25日[木] 19:00 東京オペラシティ コンサートホール 全席指定(税込): 一般 ¥3,000 学生 ¥1,000
Thursday 25 May 2017, 19:00 Tokyo Opera City Concert Hall

指揮: **ハインツ・ホリガー** フルード: **フェリックス・レングリ**
ラトヴィア放送合唱団 (合唱指揮: カスパルス・プトニシュ) **アンサンブル・ノマド**
Heinz Holliger, conductor Felix Renggli, flute Latvian Radio Choir (Kaspars Putniņš, chorus master) Ensemble NOMAD

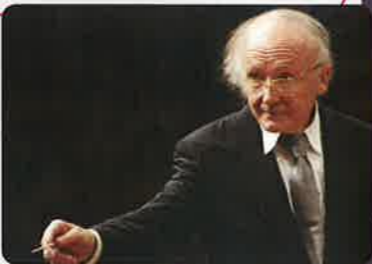


ホリガー: **スカルダネッリ・ツィクルス** (1975-91, 日本初演) [上演予定時間: 約2時間半 休憩なし]

Holliger: **Scardanelli-Zyklus** für Solo-Flöte, kleines Orchester, Tonband und gemischten Chor (1975-91) [Japanese premiere]

作曲家ホリガーの集大成ともいえるこの作品は、1975年から書き始められた、ソロフルートのための《(t)air(e)》、小管弦楽のための《スカルダネッリのための練習曲》、ヘルダーリンの詩による無伴奏合唱のための《四季》をもとに、それらを組み合わせたり、新たな曲をつけ足したりしながら、1991年に完成しました。多彩な作曲技法が約2時間半の間、息つく間もなく展開され、この作曲家を代表する作品として、ヴェネツィア・ビエンナーレのイタリヤ批評家賞“Premio Abbiati”を受賞するなど、高く評価されています。

演奏は至難を極め、特に合唱には微分音による無伴奏の超絶的な技術が必要としており、「この合唱団以外考えられない」とホリガーに言わしめた世界的合唱団の演奏にも注目です。



音楽の極限をもとめて。

私は彼のあらゆるCDと関連物を集めるホリガーフリークで、この作品は作曲家ホリガーの軌跡を考えた時、非常に重要な位置にあり、同時に戦後の現代音楽においても特に重要な音楽のひとつだと思っています。

ヘルダーリンの詩は四季をうたっているけれど、その世界は抑揚もなければ自然を諦観しているかのようで、以前パリで「まだ人間も存在しないエデンの園のような」という解説を読んで、私も同じ印象を持ちました。いわば虚無の音楽、絶対に音楽的にはクライマックスに至ることはないけれども、表現を限界まで引き出す、「極限の音楽」がそこにはあります。

ホリガーは何より、詩と音楽の連携を、詩人の伝記というか生活全体を取り込んで作曲しているのです。だからこそ一つの全体像が聞こえてくるし、その中で音色的に違う、表現が違うものが並んでいる。人間が諦観し、精神を病んで37年間もチューリングの塔に籠り生きた感じも全体から受けとれます。しかも同時に美しい。澄んだ、透明な響きがするのです。

20曲近いそれぞれの曲が多彩で、その多面性がとても魅力的だし、持てる作曲のパレットをつぎ込んだ、一つ一つの響きがホリガーの総決算のように感じられるのです。(談)

野平 一郎 (作曲家)

Toru Takemitsu Composition Award 2017: Final Concert 2017年度 武満徹作曲賞 本選演奏会

5月28日[日] 15:00 東京オペラシティ コンサートホール 全席自由(税込): ¥1,000
Sunday 28 May 2017, 15:00 Tokyo Opera City Concert Hall

審査員: **ハインツ・ホリガー** 指揮: **カチュン・ウォン** **東京フィルハーモニー交響楽団**
Heinz Holliger, judge Kah Chun Wong, conductor Tokyo Philharmonic Orchestra



▼ファイナリスト(エントリー順)

アンナキアラ・ゲッダ(イタリア): **NOWHERE** Annachiara Gedda(Italy): NOWHERE for orchestra



1986年6月20日、トリノ生まれ。トリノ音楽院で作曲をジョルジオ・コロソ・タッカーニに師事し、2015年修士課程を優秀な成績で修了。また、ルイス・バカロフ、アツィオ・コルギ、パオラ・リヴォルシ、トリスタン・ミュライユのマスタークラスを受講した。国内外の国際コンクールで入賞し、アンサンブル10/10(ロイヤル・リヴァプール・フィルのメンバー)、ディヴェルティメント・アンサンブル、アンサンブルTélémaque、アンサンブルTaG、小里明子、ヴァレンティーノ・コルヴィーノなどによって、ハダースフィールド現代音楽祭(イギリス)、ヴェネチア・ビエンナーレ、Gmen音楽祭(フランス)、エキスポ・ミラノ2015のような様々な音楽祭で演奏されている。作品はSconfinate、Bèrben、Zeddeの各社から出版。



ジファ・タン(マレーシア): **at the still point** Zihua Tan(Malaysia): at the still point for orchestra

1983年9月25日、コタバル生まれ。カナダに拠点を置き、作品はダルムシュタット夏期現代音楽講習会、ヴィッテン室内現代音楽祭、ロワイヨム作曲講習会“Voix nouvelles”、トロン市国際音楽祭(韓国)、アカデミー・シュロス・ソリテュード(ドイツ)など、アジア、ヨーロッパ、北米で取り上げられている。また、アンサンブル・モザイク、アンサンブル・ルシエル・シュ、アンサンブルSurPlusiによって演奏された。トロン市国際音楽祭においてゲート賞を受賞するなど、複数受賞している。現在はマギル大学のシューリック音楽学校で講師を務めながら博士課程で学んでいる。http://www.zihuatan.com



坂田 直樹(日本): **組み合わせられた風景** Naoki Sakata(Japan): Paysages entrelacés pour orchestre

1981年8月6日、京都市生まれ。2007年愛知県立芸術大学、2008年パリ・エコール・ノルマル音楽院をそれぞれ首席で卒業。2013年パリ国立高等音楽院にてステファノ・ジェルヴァゾーニのクラスを修了。2014年IRCAMにて研修を受ける。作品は武生国際音楽祭、Festival Musica、ロワイヨム作曲講習会“Voix nouvelles”など、多数の音楽祭や企画で取り上げられている。桑原賞、SACEM賞、第36回入野賞受賞。2011年、武生作曲賞、日本音楽コンクール作曲部門入選。2010~2011年、ローム ミュージック ファンデーション奨学生。現在、パリ在住。https://naokisakata.com



シュテファン・バイヤー(ドイツ): **私はかつて人肉を口にすることは無い** Stefan Beyer(Germany): Ich habe nie Menschenfleisch gegessen for orchestra

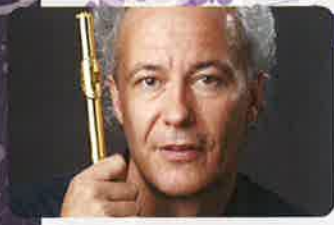
1981年11月6日、ブラウンシュヴァイク生まれ。ライプツィヒ大学にて歴史学を、ライプツィヒ音楽大学とイーテポリ音楽大学にて音楽、作曲を学んだ。2011年、ライプツィヒ音楽大学においてクラウス・シュテファン・マンコプフのもとでドイツ国家演奏家資格を取得。2011~2013年、同大学で管弦楽法の客員教授を務める。アーティスト・イン・レジデンスとして、2015~2016年にパリ国際芸術都市に、2016年にヴィーバースドルフ城(ドイツ)に滞在。奨学金や作曲賞も複数受けている。作品はアンサンブル・モデルン、ルクセンブルク・シンフォニエッタ、パプロルス・ブルセタ、ヨハネス・カリツケなどの著名な演奏団体や指揮者によって演奏されている。現在、ベルリン在住。http://www.stefanbeyer.com

世界中の若い世代の作曲家たちを対象としたオーケストラ曲の作曲コンクールが「武満徹作曲賞」です。毎回たった一人の作曲家が審査にあたることや、受賞者たちのその後の活躍により世界的に知られています。19回目となる今回は、36カ国115作品を受け付けました。審査員ホリガーの譜面審査の結果選ばれた上記作品がこの本選演奏会で演奏され、受賞作が決定されます。なお、譜面審査に際しては、作曲者名等の情報は伏せ、作品タイトルのみ記載されたスコアを使用しました。

115点の応募作品すべての譜面審査を終えて言えるのは、若い世代の音楽創作の世界について洞察を得ることができたのは私にとって重要かつ有意義な経験であったということです。われわれの時代のすべての創作活動は世界的に相互につながっているわけですが、それゆえの問題点や落とし穴、機会や可能性についても考えさせられました。応募作品の中には多数の傑出した作品があり、すべての応募者を公平に評価しつつ、そのうち4作品のみを選ぶのは困難をきわめました。基本的には、私は各作品に内在するその作者固有のメッセージを探しました。すなわちそれは作曲家が独自の創造性を表現したいという内的な衝動から生まれるものです。当然のことながら、この創造性には熟達した作曲技法が伴わなければなりません。昔ながらの言い方をすれば「メチエ」であり、形式に対するすぐれた感覚、正確な耳による精密なコントロール、使用楽器についての十分な知識、オーケストラ書法の熟達が必要とされます。[譜面審査を終えてのコメントより抜粋]

※コメント全文および原文(英語)はコンポーシウム2017のホームページでご覧頂けます。

ハインツ・ホリガー



フェリックス・レングリ(フルート) Felix Renggli, flute [5/25]

スイスのバーゼルに生まれる。ベーター＝ルーカス・グラーフ、オーレル・ニコレらに師事。バーゼル音楽院を卒業後、チューリヒ・トーンハレ管、ルツェルン祝祭管、ヨーロッパ室内管などでソロ・フルート奏者を務めた。レパートリーは幅広い分野に及び、ピリオド楽器による18世紀作品の演奏から、現代の前衛音楽における多数の独奏作品や室内楽作品の初演まで網羅している。1994年バーゼ

ル音楽院の教授に就任、2004～2014年までドイツ・フライブルク音大でも後進の指導に当たった。また、ヨーロッパ、日本、韓国、中国、オーストラリア、および南アメリカでも定期的にマスタークラスを開いている。CD収録も多く、ソロアルバムはもとより、ハインツ・ホリガー、アルディッティ弦楽四重奏団、カメラータ・ベルン、スイス・チェンバー・ソロイストなどと共演している。



ラトヴィア放送合唱団(合唱指揮:カスバルス・プトニシュ) Latvian Radio Choir (Kaspars Putniņš, chorus master) [5/25]

ヨーロッパのプロフェッショナル室内合唱団のトップに数えられるラトヴィア放送合唱団は、表現力の素晴らしさ、驚くほど幅広い歌声によって、世界中にその名が広く認知されている。1992年以降、音楽監督兼首席指揮者であるシグヴァルズ・クラヴァとカスバルス・プトニシュの2人の指揮者のもとで活動している。ザルツブルク、モンペリエなどの世界トップの音楽祭をはじめ、アムス

テルダム・コンサートヘボウ、コンツェルトハウス(ベルリン)、シテ・ドゥ・ラ・ミュージック(パリ)、リンカーン・センター(ニューヨーク)など、一流コンサートホールで演奏している。またリッカルド・ムーティ、ハインツ・ホリガー、トヌ・カリユステ、エサ＝ベッカ・サロネンをはじめとする著名指揮者との共演も数多く成功させている。



アンサンブル・ノマド Ensemble NOMAD [5/25]

1997年結成。「NOMAD」(遊牧、漂流)の名に相応しく、時代やジャンルを超えた幅広いレパートリーと斬新なテーマによるプログラムで独自の世界を表現するアンサンブルとして内外から注目されている。これまでに、「第2回佐治敬三賞」と「第3回ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞」を受賞。海外からの招待も多く、世界各地の現代音楽祭に出演している。CDは、近藤 謙など邦人作

曲家の室内楽作品集の他、海外でもH.バスケスの「Bestiario」と「Pruebas de vida」がリリースされている。2014年にはオリジナル・アルバム「巡る-Meguru」をリリース。2015年に発売された「現代中国の作曲家たち」シリーズは、レコード芸術誌の特選盤や朝日新聞の推薦盤に選ばれている。
www.ensemble-nomad.com



カチュン・ウォン(指揮) Kah Chun Wong, conductor [5/28]

1986年シンガポール生まれ。2016年グスタフ・マーラー国際指揮者コンクールで優勝、その才能と古典、現代双方のレパートリーに対する天性の成熟度で強烈な印象を与えた。この優勝を機にロサンゼルス・フィルハーモニーからドゥダメル・フェローシップ・プログラムに招かれている。2017年にはバンベルク交響楽団、香港シンフォニエッタ、サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団等との共演が予定されている。音楽教育にも情熱を注いでおり、創造性、チームワークなど、生きる上で役立つスキルを身に付けさせ

ることを目的とした音楽学校kidsphilharmonic@sgの設立に携わった。またアジア・コンテンツボラリー・アンサンブル(ACE)を創設、シンガポールの移民による多文化社会から発想を得て、このアンサンブルは演奏家、アーティスト、パフォーマーで構成されている。ヨン・シュトウ音楽院(シンガポール)において作曲、音楽学を学び、リー・クアンユー芸術文化奨学金(公共サービス委員会)の初代受給者としてベルリン国立ハンス・アイスラー音楽大学に留学。これまでにマズア、ハイティンク、サロネンらに師事。



東京フィルハーモニー交響楽団 Tokyo Philharmonic Orchestra [5/28]

1911年創立。2011年に日本のオーケストラとして最初の100周年を迎えた、日本で最古の歴史を持つオーケストラ。約130名のメンバーをもち、シンフォニーオーケストラと劇場オーケストラの両機能を併せもつ。「定期演奏会」や「午後のコンサート」などの自主公演の他、新国立劇場のレギュラーオーケストラとしてオペラ・バレ

エ演奏、NHKにおける「名曲アルバム」や、FM「ブラボー!オーケストラ」の他、さらに「題名のない音楽会」などにより全国の音楽ファンに親しまれる存在として、高水準の演奏活動とさまざまな教育的活動を展開し、クラシック音楽の広い普及に努めている。

東京オペラシティ ArtsBox 優先発売日: 2月17日(金) 一般発売日: 2月24日(金)
東京オペラシティチケットセンター
 03-5353-9999 <http://www.operacity.jp/concert/>
 チケットぴあ: 0570-02-9999 <http://t.pia.jp> (Pコード: 321-608) イープラス: <http://eplus.jp/>
 ●曲目、出演者等は、変更になる場合がございますのでご了承ください。 ●就学前のお子様のご入場はご遠慮ください。
 ●ネットオークション等での営利目的による転売はお断りいたします。



【交通のご案内】
 ●京王新線 初台駅東口(徒歩5分以内)
 ●渋谷よりバス(約20分)
 京王バス—渋61, 渋64, 渋66, 都営バス—渋66
【演奏会についてのお問い合わせ】
 東京オペラシティ文化財団
 TEL.03-5353-0770
 〒163-1403 東京都新宿区西新宿3-20-2



木のぬくもりにつつまれた新しい音とのであい
 みなさまとわかちあえることがわたしたちの喜びです



NTT都市開発